

「古稀集」～来し方思えば、持って瞑すべし（日本語②）

使いたくない日本語、または使ってほしくない日本語に「取られる」がある。もちろん、状況による。「海外旅行では、手荷物を取られることがあるので注意しなければならない」という使い方には何の問題もない。問題は、金銭に関して使われる場合である。

「～を買って〇〇円取られた」とか、「今日、～を買おうと〇〇円取られる」といった類の使われ方をされると、まるで売った方が客の金銭を奪ったような感じがしないだろうか？ 被害妄想的なきらいがあるかもしれないので、以下に理由を書く。

私は、学習塾の先生を約40年間やった。先生になりたての頃は、生徒は月謝袋に現金を入れて先生に渡してくれたものだ。月謝は、「お願いします」といって先生に渡すものだ、と私自身は教えられたが、中には、金を払う以上客でありそのように扱われて当然だ、と言わんばかりに、お客然とした態度で（払ってやると言わんばかりに）月謝を渡す生徒もいた。「子は親を映す鏡」である。もちろん、そういう態度は改めるように生徒に言うのだが、月謝を受け取った時の嫌な感触だけは残ったものである。

言うまでもないことだが、貨幣経済を営んでいる現代において、貨幣を手にしなない人はいないであろう。すなわち、誰かから貨幣を得て、必要な物品を買う時に誰かに貨幣を渡すという循環の輪の中にいるのである。ならば、貨幣の受け渡しはお互い様である。つまり、ある時は他からお金を得、またある時は他にお金を渡すわけである。そであるならば、お金を払う時に横柄な態度をとるべきではないことは自明の理である。「カスハラ」問題もそのあたりに根本的な原因が横たわっている。

「カスハラ」問題と言えば、「お客様は神様です」とは三波春夫さんの残した言葉だが、彼のオフィシャルサイトには、それに関連して彼のこういう言葉が紹介されている。

『歌う時に私は、あたかも神前で祈るときのように、雑念を払ってまっさらな、澄み切った心にならなければ完璧な藝をお見せすることはできないと思っております。ですから、お客様を神様とみて、歌を唄うのです。また、演者にとってお客様を飲ばせるということは絶対条件です。ですからお客様は絶対者、神様なのです』

これを読めば、彼の言葉がいかに曲解されているか一目瞭然であろう。

さて、「お金を取られる」という言葉である。使っている方に他意はないのだろうが、使用を慎むべき言葉ではないだろうか？ その昔は、物品を買う時に「～を分けてもらう」という言葉を使った。そして、買って帰る時には「ありがとう」と言ったものだ。

穿った見方をすれば、こういった言葉遣い一つにも、お金が万能だという現代の考え方が現れているのではないだろうか？ お金を稼ぐことがそんなに人として偉いことなのだろうか？ たかが金儲けが上手なだけなのではないか、などと私が言うと、それは貧乏人の僻みだと言われてしまいそうだ。それでも結構、私は、人に感動を与えられ心を豊かにし、ひいては世界に平和をもたらせる人が、この世で一番偉いと信じている。

(2024.12.5)